

『タペストリー』を活用した世界史「探究」の試み

—「問い続ける学習者」を育むために—

京華中学・高等学校 山田 道行 (やまだ・みちゆき)

—使用教材—

『最新世界史図説
タペストリー』
『新詳 世界史探究』



1 はじめに

本稿では、資料集『最新世界史図説 タペストリー』（以下、『タペストリー』）を活用し、生徒が主体的に「探究」する授業を試みた。2年目となった「世界史探究」であるが、どのように「探究」するのか、「歴史総合」との接続をどうとらえるのか、「受験知識」とのバランスをどう考えるかなど、多くの課題を抱えている。本稿では、筆者の実践を紹介しつつ、これら課題への解決策を提案したい。『タペストリー』をいかに活用し、生徒を主体的な学びに導けるかが肝要となる。

2 「総合」から「探究」へ

—「問い続ける」ことの意味—

学習指導要領は、「世界史探究」を次のように説明している。「『歴史総合』の学習によって身に付けた資質・能力を基に、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、事象の意味や意義、特色などを考察し、よりよい社会の実現を視野に、歴史的経緯を踏まえて、地球世界の課題を探究する科目である」（傍点筆者）。したがって、「世界史B」との大きな違いは、「地球世界の課題を探究する」ことが究極的に求められている点であり、これまで以上に、学習者が「自分ごと＝レリバンス（二井、2022など）」として課題に向き合う科目だといえよう。「歴史総合」では「近代化」以降を焦点に、「問い」を表現して学ぶ力を育んできた。「探究」では、古代世界から現代までの世界史（大項目B～E）を、「地球規模」で学び、各自が表現した「問い」に対して「探究」することが求められている、ということである。

では、「問いを表現する」とはどういうことだろうか。どのような「問い」であれば、生徒たちは「深い学び」に向かってみずからをひらいていけるだろうか。ジャレ

ド＝ダイヤモンドは、かの有名な『銃・病原菌・鉄』（2012）の冒頭で、ニューギニア人の素朴な「問い」から研究をスタートさせた。それはすなわち、「あなたたち白人は多くの物をもっている。わたしたち（ニューギニア人）には無い。それは何故なのか」という世界の不平等に対する簡潔かつ根源的な問いであった。

なぜ白人は多くの物を手に入れられたのか。なぜニューギニア人にはそれができなかったのか。ダイヤモンドは、彼らの「切実な問い」を出発点にして、世界がなぜかくも不平等に構成されているのかという課題を、壮大な研究に発展させていった。「問いを表現する」ということは、物事の本質的な疑問に対して、その人が置かれた歴史的、社会的文脈を踏まえて形成される行為であり、その人が生きる現実や社会的な必然性に結び付き、解決に向けて「探究者を動機づける」ものだといえるだろう。これを、CQ（Compelling Question：「やむにやまれぬ問い」、草原・渡邊、2021）と表現してもよい。

出発点は何気ない契機かもしれない。だが、探究者の前に立ち現れた「問い」は、視点や内容を変えながら、一生を通して追究し続けられる課題となるかもしれない。ひるがえって、学習指導要領総説にも次のような記述がある。「高等学校においては、生徒一人一人に社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが、これまで以上に重要」であると。「問い続けること」は、「未来の創り手」を育む行為ではないだろうか。したがって、生徒が「問いを表現」し、授業中に課題を解決できるよう「探究」し、得られた結果から「さらなる問いを表現」し、「高次の探究」へと向かうサイクルを大切にしたい。

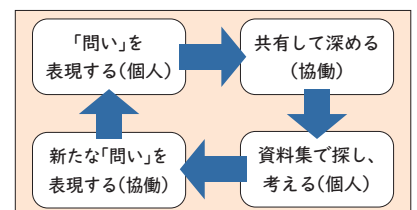


図1 「問い」と「探究」の循環

3 『タペストリー』を活用した実践

「世界史探究」における「資料集」の位置づけとは何であろうか。資料集は「歴史総合」で身に付けた「歴史的な見方・考え方」を用い、生徒が主体的にみずからの課題解決のために調べ、時には資料を対比、比較できるものでありたい。そこで、以下に示すような工夫を駆使し、活用方法を「習慣化」させたい。

地図ページを活用した「単元（授業）導入ワーク」

授業冒頭の5分程度で可能なワークである。『タペストリー』p.2以降にある「〇〇世紀の世界」は、各時代の全体像を把握するために優れている。導入時に扱う時代の地図を提示し、2人一組で「地図から読み取れること」を伝え合うよう指示する。ブレインストーミングの発想で言い合うのがよいだろう。また、予習として次のような課題もよい。指定した地図ページで「疑問に思ったこと」を事前に見つけ、関連する資料をp.54以降で探し出し、「簡潔に説明できる」ようにする。反転学習ほどの負担にはならないため、生徒は気軽に取り組める。このようなワークを繰り返すことで、「地図」と「歴史」をつなげて考える習慣や、地理的・時間的広がりを意識して歴史をとらえる方法を育むことができる。また、「疑問を持つ」⇒「問いを立てる」⇒「資料集で調べる」⇒「説明する」というサイクルの定着にもつながる。

「ヒストリーシアター」の活用

p.220には「私は遊星をも併呑したい」というセシル＝ローズの言葉が紹介されている。この言葉を「帝国主義諸国によるアフリカ分割」の導入に使用し、「なぜ、ローズはこのようなことを言ったのか？ローズにそう言わしめた背景は何か？」と問いかける。そして「p.220から、この疑問に答えられる根拠を探してみよう」と指示し、短い時間でグループワークをする。こうすることで、1時間（単元）の問いに生徒の意識が焦点化され、資料を根拠に考えようとする姿勢が形成される。

巻頭「特集」から授業を構成する

例えば、巻頭78で扱われる「アメリカ合衆国への移民の歴史」、巻頭910「アジアとヨーロッパの経済発展」などは1時間の授業に適した構成である。現代社会においても

重要な探究課題となることはもちろん、「資料を読み取る力」を身に付けるためにも好教材である。今回紹介する実践でも、巻頭1718「ロシアによるウクライナ侵攻」を活用している。

受験知識の整理として

探究を授業の中心に据えることで、「知識」解説の時間は削られてしまう。そこで、授業ノートやワークシートに関連するページを明記し、生徒が授業外での学習時間にも必ず『タペストリー』を開くように誘導する。また、知識を「理解」「整理」「記憶」するためには、文章だけでなく、資料や図版がとても役立つということを何度も指摘しておく。

随所に配置された「特集」ページも知識整理に役立てられる。例えば、「東南アジア世界完全整理」(p.83)や「遊牧民と中国」(p.96)、「朝鮮半島の歴史」(p.122～123)などは重宝する。「資料集を徹底的に読んで理解すれば、ほとんどの入試問題に対応できる」と自信を持って伝えたい。もちろん、「暗記教材」という位置づけにならないよう注意が必要である。興味を持って楽しく読み解くことが受験勉強にも効果的だと強調したい。事実、教科書と資料集だけで、難関大学の世界史で高得点を取った生徒も多い。

4 授業実践の紹介

—大項目D「諸地域の結合・変容」—

表1は、大項目D(第4部)の単元構成である。渡部・井手口による「問いの構造図」(2020)や植原(2022)らを参考に作成した。生徒が立てた「問い」が授業の中で有機的に構成され、新たな「問い」を生成することを

年間を通した探究のテーマ		グローバルな視野で、「問い続けられる私」になろう。	
単元(大項目D)全体の問い		諸地域の結合・変容:なぜ、自由や民主主義と共に戦争も拡大したのだろうか?	
CQ: Compelling Question		これから生きていく世界において、あなたは粘り強く平和を求めているだろうか?	
単元の問いを表現しよう。		「諸地域の結合・変容」を 読み解く6つの観点	
		①人々の国際的な移動、	②自由貿易の広がり、
		③マスメディアの発達、	④国際規模の変容、
		⑤科学・技術の発達、	⑥文化・思想の展開
MQ1 (10時間) 革命は誰のためか?	MQ2 (8時間) 真の自由と平等は実現可能か?	MQ3 (8時間) 国家はどこまで膨張するのか?	MQ4 (10時間) どうすれば戦争を回避できるだろう?
環大西洋革命	産業革命とバクス・ブリタニカ	帝国主義とアジアのナショナリズム	世界大戦の時代
SQ1「生命・自由・幸福追求の権利は誰のもの?」(アメリカ独立)	SQ1「イノベーションは人類を幸せにするのか?」(産業革命)	SQ1「国家の枠を超えて生きるとはどういうこと?」(世界の一体化と移民の時代)	SQ1「なぜ戦争が始まるのか?」(第一次世界大戦)
SQ2「市民は国王を処刑できるのか?」(フランス革命)	SQ2「自由と平等は本当に素晴らしいことなのか?」(イギリスの自由主義貿易)	SQ2「非暴力・不服従を本気で考えてみよう」(インドの抵抗)	SQ2「なぜ戦争を回避することが難しいのか?」(ヴェルサイユ体制)
SQ3「ナポレオンが国民国家をつくったとは、どういうこと?」(ナポレオンとウィーン体制)	SQ3「イギリスの自由をイスラーム諸国はどうとらえたのか?」(イスラーム王朝の変容)	SQ3「メディアは戦争をどう報じたのか?」(米西戦争とフィリピン)	SQ3「ヒトラーはよいこともした、という主張にあなたはどうか反論する?」(ファシズムの拡大)
SQ4「ナショナリズムは誰のため?」(ヨーロッパに広まる国民国家)	SQ4「日本と清の近代化の違いを通して国民国家を考えよう」(アヘン戦争と日清戦争)	SQ4「なぜ、ヨーロッパによる世界分割競争は止まらなかったのか?」(帝国主義と植民地獲得競争)	SQ4「国民国家は戦争を拡大させるのか?」(第二次世界大戦)
SQ5「差別の根源には何かがあるのか?」(南北戦争と奴隷解放)			SQ5「核兵器は戦争を抑止できるのか?」(東西冷戦)
MQ1に答え、 新たな問いを表現しよう	MQ2に答え、 新たな問いを表現しよう	MQ3に答え、 新たな問いを表現しよう	MQ4に答え、 新たな問いを表現しよう
単元を貫く問いに答えよう	なぜ、自由や民主主義と共に戦争も拡大したのだろうか? そして、ホロコースト、原爆など、なぜ際限なく不幸が生み出されたのだろうか?		
総括的問いを考えよう (PT: Performance Task)	これから生きていく世界において、あなたは粘り強く平和を求めているだろうか? そのためにはどんなことを学び、何をすればいいだろうか? 未来への創り手として、あなたはどうな問いを表現する?		

表1 大項目D「諸地域の結合・変容」単元構成

教科書『新詳 世界史探究』p.192～311、『タペストリー』p.180～265

目的としている。本稿では、「問い」を用いた授業の例として、第一次世界大戦とヴェルサイユ体制の授業を紹介する。

◆ 授業：なぜ戦争を回避することが難しいのか？ 第一次世界大戦とヴェルサイユ体制（2時間分）

第4部の単元全体を貫く問い（MQ）として「なぜ、自由や民主主義と共に戦争も拡大したのだろうか？」を設定した。フランス革命に始まる自由や人権の概念、国民国家の形成によって表出した民族問題や帝国主義による植民地拡大競争など、第4部で学ぶ諸課題が噴出した結果の世界大戦だととらえる。そこで、近代国家が背負ってきた歴史的諸問題を理解したうえで、「なぜ戦争を回避することが難しいのか」と問うことをこの授業の主題とした。

【導入】ヒストリーシアター“平和”という理想と“利害”という現実（p.240）

授業の導入として『タペストリー』p.240の **ヒストリーシアター** を使用し、次の2点を指示する。①「平和という理想」と「利害という現実」について、『タペストリー』で具体例を探し出そう。②戦争や平和について、あなたの問いを表現しよう。

表2 「平和という理想」と「利害という現実」：生徒の回答例

〔理想〕	〔現実〕
<ul style="list-style-type: none"> ・民族自決が重視された。 ・戦争をなくし各国が自立し、外交できるようになる。 ・軍備を縮小する。 ・自由貿易を広げる。 ・国際連盟によって国際秩序を守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・民族自決がアジア諸国には適用されなかった。 ・ドイツに高額な賠償金を課した。 ・十四か条でいわれていることがあまり実現していない。 ・日本やドイツが後に国連から脱退した。

①の指示に対する生徒の回答（表2）に対して、それぞれ「問いかける」コメントを伝えた。例えば、「民族自決が重視された」とあるけれど、『民族』が大切だと意識されるようになったのはいつから？ どんな経緯があった？」などと問いかける。第4部で学んだことを想起できるように促す。

表3 生徒が表現した「問い」の例

<ul style="list-style-type: none"> ・世界大戦でどのくらいの犠牲者が出たのか？ ・どうすれば平和な世界をつくれるだろうか？ ・なぜ国際連盟は機能しなくなっていったのか？ ・各国が総力戦になったのに、なぜ戦争を途中で止めることができなかったのか？

表3は②の指示に対して生徒が表現した「問い」の例である。ここもフィードバック

しながら、「問い」を深めるよう促す。例えば「犠牲者の数」については、調べれば分かること（『タペストリー』p.237）なので、「自分が問いを追究することで考えが広がるような形式にしよう」とアドバイス。「どうすれば平和がつけられるだろうか？」は、抽象度が高すぎるため、「もっと具

体的な問いに置き換えよう」と促す。「なぜ戦争を止めることができなかったのか？」については、「戦争を止められるとしたら、どのような条件が必要か？」「どの段階ならば止められる可能性があっただろうか？」と言い換える。このように、どうすればより深い問い、より自分を探究に向かわせる問いになるのかと考えるように投げかける。

【ステップ1】あなたが考える「戦争の現実」を最も表している資料は何か？

『『タペストリー』p.234～239から「戦争の現実」を最もよく表している資料を探しなさい」と指示をする。さらには、その資料が「どのような歴史的出来事」に即して、「どのような目的で」表現されたものなのかを書き留めるようにする。個人作業後、「自由に移動して相談し、意見を共有しよう」と指示する。

表4 「戦争の現実を最も表している」と考えられる資料は何だろうか？

資料名と説明	資料の文脈・読み取り・疑問点など
p.236「戦争をめぐる国民心理」 出征兵士を女性が見送っていて、兵士も楽しそうにしている。わりと軽い気持ちで戦争に行くという現実。	この写真の兵士は死んだかもしれないし、女性は軍事工場で働かされたかもしれない。写真が撮られた当時と、戦後に見返すのでは意味が違ってしまう。
p.236「総力戦」 軍勢力のみで勝敗が左右される戦争とは異なり、多くの国民が戦場に出陣したのはもちろん、女性が働き手となって戦争を支え、植民地からも大量の兵士を動員した。	軍事力のみで勝敗が左右される戦争とは異なり、経済力や政治力、国民の心理までもが動員された。国民は否応なく国家と関わりになり、それがさらに国民意識を高めた。
p.237「戦争で変わった自然環境」 戦争によって人の命が失われると同時に自然環境すらも失われるという現実。	戦後処理は国際関係だけでなく、人が住める場所を取り戻せるかという環境についても考える必要があると気付かされた。

表4で「総力戦」に言及した生徒は、戦争に「国民の心理までもが動員された」と述べている。このように、単に資料を挙げるのではなく、自分がどのように読み取ったのか、その資料がどのような意図で表現されたものなのかと考えることで、探究的な活動が深まるだろう。

【ステップ2】不戦条約の「理想」と戦争を回避する試み

次の段階として、不戦条約が掲げた「理想」と「現実」を話し合う。教科書『新詳 世界史探究』p.288 **史料** で条文を紹介し、不戦条約が「なぜ守られなかったのか？」をグループで考える。また、「これまでの世界史で行われてきた戦争回避の試みにはどのようなものがあったか？」を資料集で探す課題を出した。

表5 不戦条約の「理想」と「現実」：戦争を回避する取り組みを考えよう

なぜ不戦条約は失敗した？	戦争を回避しようとした試みを挙げてみよう
<ul style="list-style-type: none"> ・条約を結んでも「どこかの国がルールを守らなかった」という事態になると、その条約は破綻する。 ・自衛のための戦争が認められたことが問題。どこまでが自衛の範囲かは、主観的に決めることができるから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビスマルク外交は、フランスを孤立させるためだったが、ヨーロッパを安定させることに役立った。 ・国際連盟で集団安全保障が求められた。 ・キューバ危機で核戦争が回避された。 ・中国が維持してきた冊封体制も、東アジアの秩序を保つために役立ったのかもしれない。

表5の意見は、生徒たちが『タペストリー』を使いながら自由に話し合って形成されたものである。ここで

教師は、「人類は戦争や紛争を無くそうとさまざまな努力をしてきた」ことを強調する。「何をやっても戦争が起ってしまう」と結論づけるのではなく、困難な現実と向き合いながらも「戦争を回避する工夫」を探究する姿勢を育みたい。

【ステップ3】ウクライナ侵攻と「戦争の現実」

最後のステップとして **巻頭 17 18** 「ロシアによるウクライナ侵攻」を使用し、現在進行形の戦争についてグループで話し合う課題とした。ウクライナとロシア双方の侵攻に対する見方を『タペストリー』で読み取り、ステップ2で考察した「不戦条約」の問題点を想起しながら、「何が戦争回避を困難にしているのか」をグループで話し合った（表6）。

表6 ロシアによるウクライナ侵攻—戦争回避を難しくさせている原因は？

ウクライナから見たロシアとは？	ロシアから見たウクライナとは？
<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアがソ連に支配されてきた。 ・自分たちへの誇りが強く、1991年の国民投票では90%が独立を支持。 ・ウクライナ東部にはロシア語を話す人もいるが、全体ではウクライナ人としての民族意識が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東スラブ系で同じ民族だという意識が強い。 ・クリミア戦争のころは、ほとんどロシア帝国領だったので自国の領土だと考えている。 ・ウクライナに親欧米政権ができて、クリミア半島を併合するという意見が強くなった。
何が戦争回避を難しくさせているのか？	
<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアは、ロシア系の人々の権利が侵害されていると主張し、侵攻した。ロシアにしてみれば「自衛」のためだといえてしまうところに問題点があり、それは不戦条約の問題点と同じだ。 ・ロシアにはウクライナを自国の一部だと考えている人が多いが、他の国から見るとそれはウクライナへの侵略に見える。このことから、侵略の定義を話し合ったとしても、人々の認識が違っていると共通のルールになりにくい。 	

『タペストリー』にしたがって読み込めば、両者の対立の背景はある程度理解できる。そこで「何が戦争回避を困難にしているのか」と問うことによって、戦争を回避することの難しさについて、歴史的経緯を考慮しながら多角的に考えていく。

表7 なぜ戦争を回避するのが難しいのか？ 問いを深めよう

なぜ戦争を回避するのが難しいのか？
<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな理由があることが分かった。国家の利益と主権の問題や歴史的な対立、国家間の相互不信などが強くなってしまふときに、全体のルール（国連や不戦条約など）がもともと曖昧（侵略の定義が不十分だとか）であることによって、戦争が起ってしまうのではないか。
<p>問いを深めよう （「戦争を回避することが難しい」を乗り越えられるような問いを表現しよう）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦争の直前に国家間の対立構造が明確に現れるきっかけや現象は何なのか？ それに分かれれば、戦争の直前であることが分かり、戦争を回避するトライができるかもしれない。 ・世界中の国が「対立」よりも「協力」する方が「国益」につながると考えられるようなシステムはつくれるだろうか？ 多くの国際協力とかで他国に協力して問題解決をするようになれば、そもそもの戦争の原因を無くすことはできなくても、減らすことになるのではないかな？ ・どうすれば利害対立をするような相手国であっても、民族や価値観の違いを受け入れ、貿易や協力体制を深めることができるだろうか？ 現状のままでは戦争を回避することはできないと理解したので、乗り越えるためには、少しでも協力体制を強化するしかない。個人的には教育の力が大切だと思っている。 ・大戦のような戦争が起る前には、国家間の対立構造が単純・明確化される傾向がある、と思えた。三国同盟対三国協商、パン＝ゲルマン主義vsパン＝スラブ主義とか。だから、「どうすれば国際関係の複雑性（多様性）を保てるか」という問いが戦争回避につながると考えた。

最後に生徒の表現した問いを例示する（表7）。授業導入時に表明された問いと比べると雲泥の差があることが分かるだろう。この授業では、「戦争を回避する難しさ」を探究してきた。「現実」を理解したうえで、それでもなお「困難を乗り越えて平和を構築できるか？」と問い続けられることが重要である。したがって最後の解答例などは秀逸である。すなわち、敵か味方かという国際関係の単純化（パン＝ゲルマン主義など）が戦争の契機になっているのだとしたら、「どうすれば国際関係の複雑性（多様性）を保てるのか」という問いを立てることに意味があると生徒は言う。多様性は現代社会のキーワードだが、生徒はこの授業を通して「戦争を回避するための問い」として多様性を掲げたのである。「問い続けられる学習者」の可能性が垣間見えた瞬間である。

5 まとめ

以上、授業を紹介しながら『タペストリー』をいかに「探究」として活用するかを紹介した。「問い続ける学習」とは、曖昧な状況、先の見えない不安に耐え、多くのドグマや偏狭な考えに惑わされず、常に公正に「考える」姿勢を保つことであり、また、分からないことを、みずからの課題として「問い」続け、真摯に探究を続けることである。テクノロジーが進化し、どれだけ生活が便利になろうとも、人間が多様性を受け入れられるようになるとは限らない。むしろ昨今の状況は、その逆が大いに危惧される。高校生もまた、SNSの誹謗中傷や、ありもしないフェイクニュースにさらされている。だからこそ、「問い続ける」ことをやめてはならない。課題に向き合って真摯に考え、お互いの考えを表現しながら成長し合える環境を整えるとともに、「未来の創り手」として生徒が成長できるよう、授業空間を設定することが一層求められているだろう。

最後に、『タペストリー』は私が教えている生徒の間でとても好評である。それこそ背表紙がすり切れるほどに熟読してくれる生徒もいて、改めてすばらしい資料集だと実感している。

〈引用文献〉

- ・二井正浩編著(2022)『レリバンスの視点からの歴史教育改革論 日・米・英・独の事例研究』風間書房
- ・ジャレド＝ダイヤモンド、倉骨彰訳(2012)『銃・病原菌・鉄』草思社文庫
- ・草原和博・渡邊巧編著(2021)『学びの意味を追究した中学校歴史の単元デザイン』明治図書出版
- ・渡部竜也・井手口泰典(2020)『社会科授業づくりの理論と方法 本質的な問いを生かした科学的探求学習』明治図書出版
- ・植原督詞(2022)「主題的探究学習を軸とする『世界史探究』の単元開発—単元「身分・階級はどのように形成されるのか」を事例に—」『ChiReKo』2022年度2学期号